諏訪小だより

令和４年９月６日
９月特別号
多摩市立諏訪小学校
校長　齋藤　幸之介

御礼（「わたしの夏のチャレンジ」への御協力）

校長　齋藤幸之介

昨日より「わたしの夏のチャレンジ」展覧会が始まりました。本来ならばこの日に合わせて本たよりを発行すべきでした。お詫び申し上げます。

そして、何より、子供たちの自由研究、自由工作に多大なるお力添えをいただきましたことに感謝を申し上げます。すでに御覧いただいた方々はお気付きかと思いますが、どの子の作品も力作であり、また個性的であった、と嬉しく思っています。あくまでも私見に過ぎませんが、今年のマスコミ等の自由研究に関する報道は例年よりもおだやかであったかと思います。さらに誤解を恐れずに申し上げれば、肯定的でもあった、と捉えています。

今更ながら、とこれもお叱りを受けそうですが、今後に繋げる意味も含めて御紹介をしたいと思います。

“成し遂げた感”を重視した考え方

例えば、AERA No.33(2022 年 8 月 1 日)には、自由研究についての記事が載っていました。保護者の関わり方についても触れられており、一般社団法人・ダヴィンチマスターズの主催者である渡辺香代子さんは、「子どもが『よし、できた』と達成感を得ることこそゴール」と述べています。保護者の方にも関わっていただくことが多々ありますが、「目指すゴールを親の枠に当てはめる」必要性はない、それ以上に子どもなりの「過程」を大切にすることが記されています。

一方で、大人の関わりがなければ子供たちは達成感を味わうことも難しくなります。記事の中では、「こんなふうに書いたら」などと提案しながら取り組んだ事例も紹介されています。私事で恐縮ですが、今から４０年前、教育実習生であったときに学んだ「まねぶ」、つまり、いきなり個性的な学びを求めるのではなく、時には友達、もちろん教師のやり方を大いに参考にしながら取り組む大切さを学んだことを思い出しています。

「自由」のあり方

また、朝日新聞 8 月 20 日付朝刊にも自由研究についての記事「自由研究　『自由』って何だろう」が掲載されていました。教育学者・西郷南海子さんが、御子息の取組を中心に紹介をしています。１年生だった息子さんが、「チョコミントアイス」の食べ比べをしたこと、一度にいくつも食べると味が分からなくなるので一口食べては水を飲む、といった「科学的な手法」を組み入れたことなどが紹介されています。しかし、完成した自由研究を前に息子さんが、この素晴らしい作品が「学校で浮く」ことを心配して提出しなかったことも紹介されています。

子どもなりのバランス感覚で提出が叶わなかったことはあまりに残念です。改めて「何でも取り組んでよい」こと、そして、西郷さんの言葉を借りれば「ただ好きだから」や、さらに難解ではありますが「これはどうしても調べてみたい」という子供たちなりの「問い」が出発点となる取組になるよう、平素の教育活動を吟味しながら考え続けたいと思っています。

本校教職員一同は、子供たち一人一人の取組が実現するように、夏休み前に事前指導を行ってきました。また、8 月 20 日過ぎには、複数回に亘って展覧会の会場準備を中心に行ってまいりました。皆様のお力添えによって実現するために強い願いをもって取り組んできたことをお伝えします。

子供たちはお互いの作品を鑑賞しながら、例えば先輩の作品に「あこがれ」をもち、「来年は自分も」と願いをもつかもしれません。このことが新たな「問い」になってくれれば、とも思います。そして、「夏のチャレンジ」が長く続くように、平素の活動も工夫できるようにしたい、と考えています。